嶋と神仙思想

―― 7～9世紀の庭園の系譜 ――

金子裕之
奈良国立文化財研究所

要旨　日本文化と道教を考える視点の一に庭園がある。古代の庭園（当時の語で嶋）は神仙思想と関わりが深い。その思想は、7世紀代に朝鮮半島経由で伝来した可能性が高く、8世紀初頭に唐との国家的交流が再開したことを契機に、半島型の方池形と異なるは曲水型の園池が展開する。さらに、山岳と滝を構成要素に加えた型が9世紀以降に伝来することで、平安前期の滝組みをもつ庭園が成立したと考える。

本報告は、1998年6月の国際日本文化研究センターEUシムポジューム報告「古代貴族の宴」の続編である。

I　古代庭園の始め ―― 嶋大臣

古代庭園の源流をめぐっては二つの説がある。一は巨岩など磐座（いわくら）に神が宿るとする古墳時代以来の信仰が元になったとする見方であり、二は中国・朝鮮半島の影響とするもの。前者は園池の主要部分に立てる石と磐座との類似や、滝などからの連想であろう。重森三玲・完途氏の業績は代表例といえる[1]。これを継承したのが森蘊（おさむ）氏であり[2]、古代から明治期まで全国273箇所の発掘庭園資料を収める奈良国立文化財研究所編『発掘庭園資料』[3]は、この系列にある。1991年に三重県伊賀上野市で見つかった5世紀代の城之越遺跡は、三箇所の湧泉があり、泉周囲には貼り石が、さらに湧泉の合流部には貼り石に加えて立石があるなど、部分的には古代庭園に類似する[4]。湧水点に貼り石など行う遺跡は奈良県奈良市南紀寺遺跡などにもあり、こうした見方を傍証するかのごとくである。

しかし、日本最初の漢詩集である『懐風藻』や『三国史記』、さらに飛鳥地域で検出相次ぐ7世紀代の庭園のあり方を詳細にみると、導水路（遣り水）、複数の園池、橋、露台、建物群などからなる古代庭園の起源は後者にあり、史料では推古34年紀にみる嶋大臣の逸話に求めるべきと思う。

626（推古紀34）年5月丁未条には、当時最大の権力者であった蘇我馬子（?-626）の薨伝記事があり、彼が飛鳥川から水を引き嶋を営む記事を載せる。

「家於飛鳥河之傍。乃庭中開小池。仍興小嶋於池中。故時人曰嶋大臣」とあり、岩波古典大系本は「飛鳥河の傍に家せり。すなわち庭の中に小なる池を開れり。よりて小なる嶋を池の中に興く。故、時の人、嶋大臣という」と訓み下す。嶋は今日の庭園のこと。山斎とも表記する。

山斎は本来は園内での書見用の亭のことである。

推古朝は前後5回にわたり中国に遣隋使を送り、律令制へ大きく胎動を始めた政権であり、この記事は大陸的な庭園受容を示唆すると思う。645（皇極4）年6月8日、蘇我入鹿（鞍作）の暗殺に始まる大化改新によって蘇我本宗家は滅亡。馬子嶋は皇室の所有に帰し、皇極天皇の娘、吉備姫王などが居住し。壬申の乱の前後に天武が滞在し（天武即位前紀10月壬午条、天武元年9月庚子条）、681（天武10）年9月辛丑には周防国が貢じた赤亀を「放嶋宮池」（9月辛丑条）とある。いつの時点か、ここが草壁皇子（662－689）の嶋宮となったとする。

皇太子草壁は天武と持統の皇子で、即位を待たずに689（持統3）年4月13日に28才で没した。『万葉集』挽歌には柿本人麻呂の長歌と、舎人の短歌があり、園池の様子がみえる。

嶋宮勾りの池の放ち鳥人目に恋ひて池に潜づかず（巻2－170）

一連の挽歌によって、嶋宮には上の池と勾りの池があり、石をならべた磯や滝口などが推定できる。勾りの池について、通説は岸辺が蛇行する池とする。

嶋宮は草壁没後も存続し、奈良時代中葉の750（天平勝宝2）年2月24日付「官奴司解」（大日本古文書3－359）などに見える。

その推定地は奈良県高市郡明日香村島庄にあり[5]、ここでは人頭大の玉石で護岸した方形池と、別に岸辺が蛇行する「曲池」（SX 8706）の一部が見つかっている。方形池は内法が42メートル、高さ2メートル、底にも花崗岩を敷きつめる。岸はほぼ垂直に立ち上がり、外側に幅約10メートルの堤がある。池の建設は7世紀初めで、下限は10世紀末という。

他方の「曲池」は、方形池北東の住宅建設地から見つかった。ここは飛鳥川支流の冬野川から水を引いており、当初は素掘りで、後に岸に玉石を貼りつけ整備する。こちらには内側に東西2.3メートル、南北0.3メートルの長方形石組みがある小池（SX 8703）が接する。直線的な溝の途中にあり、池の導水路の可能性もある。しかし、部分的な調査にとどまっており、池を含めて全貌は明かでない。年代は7世紀中頃という[6]。

嶋宮推定地の他にも、飛鳥地域や南の吉野（宮滝遺跡）では園池遺構がある。これらは玉石で護岸した方形プランの池、大きく蛇行する石溝が伴う池、曲池風の池などがあって複雑である。たとえば、石神遺跡、飛鳥池遺跡（飛鳥寺の東南）の池は玉石で護岸した方形プランの池である。前者は一辺6メートルの方形で検出面からの深さは0.8メートル。後者は東西7.9メートル、南北8.6メートル、深さは1.6メートル以上である[7]。石神遺跡に類似した石組み遺構は、宮城県仙台市郡遺跡でも見つかっている。こちらは政庁中心部の東北にあり、東西3.7メートル、南北3.5メートルと規模は小さい[8]。園池施設か否か疑問がある。

また小墾田宮推定地の一である奈良県明日香村豊浦字古宮では、石積みの小さな池と、付随する蛇行石溝および斜行溝がある。池は東西2メートル、南北3メートル、深さ0.5メートルほどの小さなもの。年代は7世紀の初め頃で、池の北に桁行6間、梁間3間の東西棟建物がある[9]。小墾田宮は豊浦宮、耳成行宮につぐ推古朝（592－628）三番目の宮で、603（推古11）年から推古が没する628（同36）年まで25年間宮があった。池から西南に流れるというものの部分調査にとどまり、導水路を含む全体構造は明らかではない。

吉野宮（宮滝遺跡）の園池遺構は汀線が大きく蛇行する曲池風である。推定規模は東西50

メートル、南北20メートル、検出面からの深さ0.6メートル。7世紀中葉から末に機能したようで、池本体の北東に接して素掘り溝と長方形の土壙がある。嶋宮遺跡の「曲池」など類似遺構から、池への導水路の一部とする[10]。宮滝遺跡や嶋宮遺跡の長方形小池に類する遺構には韓国慶州の雁鴨池がある。ここでは広大な池に注ぐ流水溝の途中に、石造の2重の石槽や玉石の小池を設ける（第9図）。右の例がこの玉石組の槽と同じ機能をもった施設の可能性はある。

猪熊兼勝氏は、明日香村岡の酒船石を韓国慶州の鮑石亭[11]などにみる流盃渠とし、1935年にその南10メートルで掘り出された車石をこれに伴う導水路とする。車石は表面を平らに仕上げ、中央に幅9センチメートルの轍状溝を刻んだ16個体の石から成る。飛鳥資料館の屋外展示では、岡の酒船石と車石、これに岡の酒船石の西南約600メートル、明日香村出水（でみず）字ケチンダで1916年に見つかった酒船石（出水の酒船石）を並べ、水を流す[12]。

このようにみると、古宮土壇の小墾田宮推定地の園池遺構は、これのみで完結したとすることは不自然である。玉石敷小池は園池本体というより猪熊氏が指摘したように、雁鴨池における石槽（猪熊氏は「観賞用池」とする）などと同類の施設であり、溝の末である未発掘地に園池本体を想定すべきであるまいか。ここでは発掘遺物に百済様式の蓮華文様磚があり、雁鴨池との違いは百済と新羅、年代の違いによるのかも知れない。

このように、飛鳥と周辺地域の7世紀代の園池遺構は、様相がかなり複雑である。とはいえ、ここでは大きな玉石を積んだ切り立った護岸、方形主体の園池が特徴的である。これが韓国古代の園池と類似し、その影響によることは尹武炳氏の指摘があり[13]、すでに通説化している。こうした園池を「朝鮮半島型」と呼ぶことができよう。

Ⅱ　半島型から中国型へ

8世紀初頭の『大宝律令』（701年）の成立、平城京遷都（710年）に呼応するように、園池のあり方は「朝鮮半島型」から「中国（唐）型」へと大きく転換し、先の例の汀線が大きく蛇行する型が主流となる。

8世紀初頭に遡る可能性がある園池には平城宮東南隅の東院庭園（第1，5，6図）、左京三条二坊長屋王邸跡[14]、および左京一条三坊検出の庭園がある[15]。これは流水溝と池のあり方から、少なくとも三タイプがある。

一は曲流する溝からなる園池である。長屋王邸跡の園池がある。敷地東南隅にあるもので、菰川（こもがわ）の古墳時代流路を掘り直した幅が3～7メートル、検出面からの深さ0.5メートル前後、推定規模は南北170メートル。溝や邸宅内で見つかった木簡から716（霊亀2）年頃には確実に存在し、すぐ南にある「特別史跡平城京左京三条二坊宮跡庭園」[16]の下層に連なる。現状は幅が広い流水溝であり、もともと流水溝のみで成るのか、この末に池があるのか否かは、未調査のために不詳である。汀や底に玉石を用いた特別史跡宮跡庭園は、この園池跡の南半部を再利用したもので[17]、成立は天平末年、すなわち8世紀中葉以降に下る[18]。（第2，3図）

二は流水溝の末に園池を構成するもの。左京一条三坊の庭園がある。園池は平塚3号墳の周濠を再利用して景石を据えたもので、古墳周濠の幅と地形の傾斜からみて推定規模は東西18

メートル、南北10メートルほどという。底に石敷きはなく深さは23センチメートルほど。これに注ぐ流水溝にも石敷きはなくしがらみ跡がある。流水溝（SD 485）は逆L字形に屈曲し、その先から二条に分かれて再び合流するが直線的である。二条の溝は時期差がある[19]。SD 485の木簡には713（和銅6）年、717（霊亀3）年、723（養老7）年の紀年銘があり、8世紀初頭に遡る。

三は平城宮の東院東南隅にある園池である。池本体は東西南北約60メートル、中嶋があり岬と入り江による出入りが大きい汀線を呈する。全面石敷きとし、嶋や岬には太胡石に似た立石を立て、周囲には建物や橋などがある。この園池は大きく2ないし3時期の変遷がある（第7図）。時期変遷の違いは3時期説が①方形池→②曲池A→③曲池Bの変遷を考えるのに対して、2時期説は①→②が時期差ではなく施行の工程差とみることにある[20]。

水源は東北隅とするが流水溝はないようで、あってもごく短いものであろう[補注]。ことに、池の西南に排水溝がある点が二と大きく異なる。いずれも玉石を敷き初期の排水溝は直角に屈曲するだけであるが、後期には複雑な曲線を描く。いわゆる流盃渠であろう。池の北岸には正倉院宝物の「仮山」[21]に類似した石組がある。「仮山」はスギ材の州浜型に朽木と香抹による山岳形を組み合わせたもの。銀製樹木があり全体に彩色がある。長径87センチメートル、短径45センチメートル、高さ31センチメートル。仏前供養具という。山岳表現は同じ正倉院宝物の「黒柿蘇芳染金銀山水絵箱32号」蓋表（中倉156）の山水画や、8世紀前半の敦煌窟第103窟南壁中央の山岳表現[22]など、峰がそそり立つ古式の山岳表現と一致する。

なお、『続日本紀』宝亀4（773）年2月27日条に楊梅宮が竣工。光仁天皇が徒居し、続く宝亀8（777）年6月18日条に「楊梅宮南池生蓮。一茎二花」とある。当時ここを「楊梅宮南池」と呼び、「蓮池」と認識していた。これは8世紀前半の天平年間に遡るようで、平城宮馬寮推定地北の溝SD 6499で検出した木簡には、

「・　進兵士三人依東薗

・　□移　天平十年閏七月十二　」とあり、

別の木簡には

「・□（嶋カ）掃進兵士四人依蓮池之格採数欠」（裏面略）

とある。嶋を掃除する兵士を進める内容で、「東薗」の語句は東院東南隅外の築地東雨落溝SD 5815木簡（平城宮発掘調査出土木簡概報11－10下段、同16上段）にあることから、報告書ではこれを東院庭園のことかとする[23]。

この見通しが正しければ、738（天平10）年頃には東院庭園を「東薗」と呼称し、すでに「蓮池」であったことになる。いずれにしても東院園池の成立は8世紀前半にある。

平城宮・京内における8世紀代の園池は出入りが大きな平面プランと、浅い池底、なだらかな州浜をなす岸辺などが特徴である。8世紀例は部分的に宮滝遺跡など前代園池の系譜を受け継ぐかのごとくであるが、これは中国型とすべきと思う。「大宝令」を契機に中国（唐）の文物を直接受容する体制が整ったこともあり、半島型園池から中国型へと転換するのであろう。とはいえ、庭園設計者が彼地の庭園に実際に接した上で施工したか否かは別問題であり、むしろ可能性は少ないように思う。その理由は、8世紀初頭の日中文化の交流に多大の貢献をした

遣唐使の派遣時期と、庭園の年代が齟齬するからである[24]。

そこではさまざまな試みがあったであろう。前代の伝統を一部で受け継ぎながら、新来の中国山水画、詞華集など文献的知識に加えて、離宮付近の地形など様々な要素を加え新様式を創り出したと考えたい。以下、この点について述べよう。

第10図には、二条大路木簡のいわゆる「楼閣山水図」を示した。二条大路木簡は長屋王邸の北、左京三条二坊二条大路の東西に掘った土壙（ゴミ穴）から見つかった木簡のこと。7万4千点にものぼる上に、年代が天平7～9年（735～737）に限定できる点で重要である

この図は折敷（おしき）と呼ぶ木製容器の底板（長さ61.3センチメートル、現存幅10.8センチメートル）に写したもので、山岳から落ちる瀑布、楼閣と2棟の建物、その前面の曲池と嶋、これらを画する曲率がある磚積みの壁、さらに外側の壁面に描く花柄模様[25]。これには中国江南の景観を写したとする浅川説がある。妥当な見解であろう[26]。

長屋王の死後（729年2月）、邸宅跡は一時期、光明皇后の皇后宮となったようで、邸宅周囲の道路側溝から兵衛府関係の墨書土器、木簡などが見つかっており、また二条大路木簡には

「・芳野幸行用　　」

天平八年七月十五日」（平城宮発掘調査出土木簡概報22－13下）

と、天平8（736）年7月の聖武天皇吉野行幸に関する木簡などがあって、聖武天皇がここに滞在したことを窺わせる。二条大路木簡は、天平9年～10年に皇后宮から一括廃棄したものが主体であった可能性が高い[27]。

皇后宮には楼閣山水図のもとになる屏風画があったのであろう。正倉院には光明皇太后が聖武太上皇の七七忌に、遺愛の品々を盧舎那仏に施入した品々を書き上げた天平勝宝八歳（756年）六月二十一日付「東大寺献物帳」がある[28]。その末尾に「御屏風壱佰畳」の項目がある。これは「大唐古様宮殿畫屏風」や「鳥毛立女屏風」など屏風類の総数と内訳を記す。ここには山水畫関係屏風もみえ、「山水畫屏風一具両畳十二扇」、「古様山水畫屏風六扇」など4種がみえる。多くは現存しないが、当時、宮廷には中国の山水畫屏風が幾種類か伝来したことを裏づける[29]。

「東大寺献物帳」の施主である光明皇太后と聖武太上帝、「楼閣山水図」をつなぐとこの図が「献物帳」記載の「山水畫屏風」と結びつく可能性もある。こうした山水図によってただちに園池を営んだか否かは今後の課題であるが、右の図中の池が曲池であることは、8世紀における庭園様式の源を考える上に重要であろう。

長屋王の庭園に関しては、漢詩集『懐風藻』（序文は751・天平勝宝3年冬11月）に中国六朝期（3世紀-6世紀）の名園として名高い金谷園になぞらえた漢詩が残る。

長屋王「五言。初春作宝楼にて置酒す」

(69) 景は麗し金谷の室、年は開く積草の春、松烟ならびて翠を吐くき、桜柳分きて新しきことを含む。嶺は高し闇雲の路、魚は驚く乱藻の濱。激泉に舞袖を移せば。流声松ゐんに韵く（下略）[30]。

河南省洛陽の西北にあった晋国（295－385）石崇の金谷園については、梁（502－556）の昭明太子（501－532）が編んだ『文選』に「金谷集作詩一首」（巻20）があり、それらによって

知識を得たのであろう。

「金谷集作詩一首」注には、金谷水が「東南流」するとある。左京三条二坊の長屋王邸がこの佐保楼か否か、報告書は先に述べた左京一条三坊を佐保楼にあてる。しかし、私説では可能性が高いと思う。そして、王邸の曲池は東北を源とし東南流する。その末は未調査のため不詳である。平城宮東院庭園もまた、東南流する。これは西南角から出て、築地塀に添って東流し途中で暗渠によって南折して宮外に出る。同様のことは、平安前期、11世紀代に成立した日本最初の庭園技術書『作庭記』にみえ、これを「青龍水」と呼ぶ。この書は藤原頼道の子、橘俊綱（1028－1094）の著作説が有力である。右の二例は占地を含めて、この青龍思想に見事に叶う。

金谷園は長屋王だけでなく、同じ『懐風藻』の藤原宇合「88五言。暮春南池に曲宴す　一首および序」にみるなど、奈良朝有力貴族の憧れであり、こうした知識が新型の園池を形成する動機となったのではなかろうか。

次に、左京三条二坊特別史跡宮跡庭園の原型として、高山暹治氏による神仙境であった宮滝（奈良県吉野郡吉野町）付近の吉野川模倣説がある[31]。（第3図）。

吉野が神仙境であることは、『古事記』雄略記に天皇が吉野川の辺りで詠んだ歌、

「呉床座の神の御手もち弾く琴に舞する女常世にもがも」から指摘があるし[32]、『懐風藻』の吉野を詠う詩では「贈正一位太政大臣藤原朝臣史。五首」32に「霊仙駕鶴去」とあり、「従四位下左中弁兼神祇伯中臣朝臣人足」45に「此地即方丈　誰説桃源賓」とあって疑いがない。

『日本書紀』によると天武・持統両天皇は繁く吉野に赴いた。ことに持統女帝の吉野行幸は生涯に34回に及ぶ。吉野宮は、吉野川の右岸にある宮滝遺跡（奈良県吉野郡吉野町）とするのが定説化しており、調査によって斉明期、天武・持統期および8世紀前半の聖武期の宮殿跡、園池跡などが見つかっている[33]。吉野宮の南には、神仙が住むと信じられた青根ケ峯がある[34]。

高山説に関連して興味深いのが、宮跡庭園の原型を龍の側面形とする水野正好説。『作庭記』などが「青龍」にこだわるように、水野説は南に頭、北東に尾、四肢を東とする龍の左側面形を写したとする[35]。水野説を敷衍すると、宮滝付近の吉野川が龍の姿であることが、ここを神仙境にした動機と説くことも不可能ではない。

7世紀代の伝統に加えてこうした新知識、中国思想への憧れが8世紀の新園池を産みだし、それが平安期庭園の原型になると思う。

嶋の造営はいろいろな意味がある。重要なのが先学が夙に指摘する神仙思想であり、その傍証は園池の中嶋を蓬莱山と呼ぶこと。蓬莱山は中国の古伝説にみえる蓬莱山、方丈山、瀛洲（えいしゅう）の一である。

神々の祭りを記録した司馬遷（BC. 135?－93?）の『史記』（BC. 91年成立）「封禅書」（巻28）には、

「使人入海求蓬莱方丈瀛洲。此三神仙者。其傳在渤海中。（略）諸僊人及不死之薬皆在焉。其物禽獣盡白而黄金銀為宮闕未至望之如。及到三神仙反水下。」と、渤海湾に浮かぶ巨大な亀ともいう鼇（ごう）が背中に三神山を負うこと、金銀の宮殿があり、神仙が不老不死の生活を楽しむこと、道士の言に惑わされた秦の始皇帝（在位BC. 206－202）や漢の武帝は神仙の実在を信じ、不

死の薬を入手するためにたびたび船を仕立てたことがみえる。

嶋はこの三神山を象る。漢武帝の故事には、「池中に蓬萊方丈瀛州方梁、海中の神山亀魚の属を象る」(『漢書』郊祀志下)とあり、紀元前113(元鼎4)年、武帝が河東に行幸し、后土神を祀った時、河に船を浮かべ群臣と宴したとある[36]。

この伝統が朝鮮半島を経由して伝来する。『三国史記』巻27、百済本紀第5の634(武王35)年春3月条には「三月穿池於宮南。引水二十余里。四岸植以楊柳。水中築嶋擬方丈仙山」、「水中に島嶼を築き方丈仙山に擬す」とあり、百済が扶余王宮の南に嶋を営んだと記す。

また、百済の滅亡後、新羅が王宮内に営んだ雁鴨池は『三国史記』巻7、新羅本紀7の674(文武王14)年2月条に、

「二月宮内穿池造山種花草養珍禽奇獣」(宮内に池を穿ち山を造りて花草を種え珍獣奇獣を養う)とある。これについて『東史綱目』は「王宮内に池を穿ち、石を積みて山となし巫山十二峯を象る。花卉を種え珍獣を養う。其の西は即臨海殿。池は今雁鴨池と称し、慶州天柱寺の北にあり」と記して、園池を海に見立てる[37]。この王宮は月城のことである。また、巫山は四川(しせん)省巫山県の霊峰で、神仙の山として名高い。

池に浮かぶ中嶋は、日本では1基が多いが、韓国の雁鴨池で検出した中嶋は3基である(第1図下段)[38]。

すでに述べたように、飛鳥期の園池が朝鮮半島経由である可能性が高く、嶋の造営は三山伝説に基づく思想の伝来を意味しよう[39]。次の課題は蘇我馬子の嶋を含め、飛鳥期の園池が百済直輸入か、新羅経由かであろう。百済は中国南朝の都建康(南京。東晋以後陳まで国都)に多くの文化的影響を受けた[40]。時代が降るが8世紀中頃、唐の許嵩が撰した『建康実録』(呉の孫権、晋、宋、斉、梁、陳まで著録)には、建康の苑池の記録がある。これが百済扶余の「池於宮南」と関わるなら、わが国の嶋と思想は中国南朝を考慮する必要がある[41]。8世紀はこの思想が一層強まるのであろう。

他方、先に述べたように平城宮東院庭園が738(天平10)年頃に「蓮池」とすると仏教の浄土思想に関わる。これは正倉院宝物「仮山」が大仏供養具であることと表裏の関係にあり、神仙思想が様々な要素を含んだ型で伝来した可能性がある。

Ⅲ　8世紀庭園の要素

7世紀代の園池を一新した8世紀庭園の特徴は、発掘遺構では、出入りの多い曲池、中嶋、築山、なだらかな州浜、立石(平城宮東院庭園では、太胡石に似た表面に小孔ある石を立てる)、池底の玉石敷、景石、遣り水に類する曲水溝、橋、亭などがある。(表1)

これらと9世紀以降の園池を比べると、大きな違いがある。なかでも、滝組構造の有無は重要である。平安期庭園の代表を、森蘊『寝殿系庭園の立地的考察』[42]、牛川喜幸『池泉の庭』[43]、『発掘庭園資料』等から拾うと、嵯峨院(嵯峨天皇の別荘)庭園名古曽滝(大覚寺大沢池)、法金剛院庭園の青女滝(せいじょがたき)など滝が重要な要素となる例が多い。しかし、8世紀代の園池に明確な滝組みは今のところ、みえない[44]。

表1　『懐風藻』『万葉集』山斎歌にみる園池の構成要素

施設関係	池水（巻20－4512）、磯影、池水（巻20－4513）、小高い山斎（巻3－452）、池、磯（巻20－4503）、磯浦（巻20－4505） 以上『万葉集』 嶺、乱藻の濱、激泉（69）、鏡を沈む小池、曲裏の長流、浦、岸、林亭、池台（88序） 以上『懐風藻』。
鳥や樹種	鶯（巻6－1012）鴛鴦、馬酔木（巻20－4505、4511）、木立（巻5－867）、磯松（巻20－4498）、梅花（巻20－4502） 以上『万葉集』 松烟、桜柳、魚、松ゐん（69）、紅桃、岸辺翠柳（88）

『懐風藻』『万葉集』山斎歌は、岸俊男「嶋雑考」『日本古代文物の研究』塙書房、1988、311－313による。

9世紀代という嵯峨院名古曽滝（大覚寺大沢池）に関して、調査報告書[45]では名古曽滝は瀑布ではなく、滝の石組みの元から湧水がしみ出す形とし、その年代は嵯峨院が造営をみた9世紀前半にあり、10世紀末には中絶したとする。その根拠は、滝の末にあたる流路SD43に堆積した遺物（土器）と『拾遺和歌集』（1005－1006頃）の藤原公任の歌に、

「瀧の音は絶えて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞こえけれ」

と、あること[46]。ただし、名古曽滝自体の調査所見は「こうした滝の形態が嵯峨院の時期にまでさかのぼるかどうか不明である」[47]、とする。

「滝」の語自体はすでに『万葉集』嶋宮の歌にみえる。

東の滝（多藝）の御門に伺侍へど昨日も今日も召すことも無し（巻2－1184）

この歌では嶋宮の園池に東滝（多藝）があるかのようである。しかし、古代の滝は白川静『字訓』によると、瀑布ではなく急流の意味であるから、『懐風藻』69の「激泉」と似た意味であろう。

滝組みの出現は、これまた中国の影響であるまいか。宋の宮苑として名高い艮岳（こんがく）については周維権氏[48]や、河原武敏氏の復原案がある[49]。

艮岳は北宋の徽宋皇帝（在位1101－1125）が政和年間（1111－1117）、宮城の東北（艮（こん）・みずち）に営んだ人工の巨大な山岳である。艮岳の建造は、道士が宮の鬼門に当たる東北の鎮めとして勧めたことが動機という。6世紀前半に成立した道教教典である陶弘景撰『真誥（しんこう）』によると、艮には死者が赴く羅酆山（らほうざん）がある。艮岳はこの死者世界から漂いでる鬼（き）（死者）に対する防御の意味があろう[50]。徽宗の『御製艮岳略記』を元にした復元では、右の二説でやや違いがあるものの艮岳周囲に雁池、沼、鳳池、研池などがあり、壽山と万松嶺の間から落ちる瀑布が雁池に注ぎ、ついで大沼池、鳳池などの諸池に連なるとする（第11図）。

中国人の庭園観は日本人のそれと異なり、人工的な造形を重視すること[51]、右に述べた嶋の意味を考えれば、艮岳は単なる山岳ではなくその名が示すように聖山の意味であり、瀑布となって落ちる聖水が嶋を満たす、といった図式となろう[52]。聖水が嶋をめぐるのは、三神山の間を海水が周回することと同じである。山岳周辺の無数の嶋は別としても、山岳から落ちる瀑布が嶋に注ぐ型をよく示すのは、12世紀前半代に降る法金剛院庭園である（第12図）。

仁和寺の南、双が丘東麓にあるこの浄土式庭園は、『令義解』などの編纂者である右大臣清原夏野（782－837）の山荘を没後に寺に施入したもので、五位山南麓の青女滝の水を遣水として幅広く流し、末が大池に注ぐ様が明確である。五位山（標高57.8メートル）には古墳があ

り、847（承和14）年10月19日に、遊猟の途次ここに登った仁明天皇が従五位を授けたことに由来する。すなわち、

「辛亥。授雙丘東墳従五位下。此墳在雙丘東。天皇遊猟之時。駐蹕於墳上。以為四望地。故有此恩。壬子。雙丘下有大池。々中水鳥成群。車駕望幸。放鷁隼拂之。（略）」（『続日本後紀』10月19・20日条）とある。

青女滝は高さ約4メートル、1130（大治5）年に改造をみた[53]。この滝をもとにする遣り水と園池については部分的な調査がある[54]。

艮岳の建造は宋代に下るが、基本的な構造は8世紀以前に遡るようで、河原武敏氏は隋の西苑に原型を想定する[55]。これを傍証するのが二条大路「楼閣山水図」である。すでに述べたように伴出した紀年銘木簡から、この年代は735～737（天平7～9）年頃である。「楼閣山水図」はこうした構造が中国で8世紀初頭にすでに成立しており、この図を仲立ちに艮岳復元図、法金剛院庭園遺跡などを比較することで、平安時代の滝組構造の起源が奈辺にあるか明らかにできよう。

園池の背景に山岳を象ることは、平城宮東院庭園の後期石組み（仮山）が示す。しかし、そこから瀑布となって落ちた聖水が園池の源をなす、という構図が8世紀段階に出現するのか、宋代に改めて伝来するのかは今後の課題であろう。いずれにしても、古代の園池とその思想は、中国の庭園文化を直接・間接に受容することで、劇的な展開をみるといえよう。

注および引用文献

（1） 重森三玲・完途1973『日本庭園史体系1　上古・日本庭園源流』社会思想社。

（2） 仏教芸術学会1976「古代庭園の諸問題」『仏教芸術』第109号、毎日新聞社、3－18他。

（3） 小野健吉編1998、奈良国立文化財研究所史料第48冊。この書は発掘調査の概要も収録し、便利である。

（4） 三重県埋蔵文化財センター1992『城之越遺跡』三重県埋蔵文化財調査報告99－3。城之越遺跡は古代庭園の源流として名勝指定を受け、復原整備の上遺跡公園として公開している。

（5） しかし、小澤圭二郎氏が1890年に『国華』に連載した庭園史の先駆的業績である「園苑源流考」では、宮の呼称は皇太子の施設とし馬子嶋とは別とする。小澤圭次郎1890「園苑源流考」『国華』第6号、p. 9。小澤説は馬子嶋を一種の模型とするが、これは誤りと思う。
嶋宮と馬子嶋は異なるとの説に加担したい。私説は嶋宮推定地から西北約1.5キロメートル、飛鳥川左岸の甘樫丘東南麓にある蘇我本宗家伝承地である。甘樫丘南麓には字「エミシ」がある。『日本書紀』によると蘇我氏の舘が甘樫丘に近接する。すなわち「冬十一月に、蘇我大臣蝦夷・兒入鹿臣、家を甘樫岡に雙べ起つ。大臣の家を呼びて上の宮門と曰ふ。入鹿が家をば、谷の宮門谷、此をば波佐麻と云ふ と曰ふ。」（皇極3・644年11月条）とある。字「エミシ」は甘樫丘南の小谷であり、蝦夷の転訛とするとここは飛鳥川左岸であり蘇我大臣が嶋を築くには水利の関係からもふさわしく、再検討が必要と思う。
ただしこの場合、飛鳥寺以北の用水を取水する木葉堰のあり方が問題となる。現在、堰の水は右岸方向に流れ、左岸への水路はないようであり、この点が障害である。

（6） 橿原考古学研究所「明日香村飛鳥京跡」『奈良県遺跡調査概報1988年度（第二分冊）』1－32、図版、および付図「嶋庄遺跡」。
方形池は土器の年代や中島がないことを理由に、亀田博氏は嶋宮の池とは別で、蘇我氏の嶋かとする。亀田博1988「飛鳥地域の苑池」『橿原考古学研究所論集』9、吉川弘文館、415－469。

中島がないとすると、「小なる嶋を池の中に興く」とする推古紀34年5月条の記述と合致しない。中島が未発掘地にある可能性は否定できない。なお、亀田氏は勾池と「曲池」の関連を示唆する。亀田前掲書 p. 467

（7） 奈良国立文化財研究所1998『奈良国立文化財研究所年報』1998－Ⅱ、34－39。

（8） 仙台市教育委員会1990『郡山遺跡発掘調査概報』第Ⅹ冊。

（9） 奈良国立文化財研究所1976『飛鳥藤原宮発掘調査報告』Ⅰ。

（10） 橿原考古学研究所1996『宮滝遺跡』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告報告第71冊、130－132。

（11） 鮑石亭は新羅王都の南、南山西麓にある離宮であり『三国史記』新羅本紀第12、第55代景哀王4・927年9月条には、景哀王の終焉地とある。

（12） 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館1986『飛鳥の石造物』飛鳥資料館図録16。この図録には飛鳥の石造物に関する資料、史料、文献目録および論文抄録まで網羅する。

（13） 尹武炳1990「韓国の古代苑池」『発掘された古代の苑池』学生社、191－210。

（14） 長屋王は高市親王の子供で、天武天皇（在位672－686）の孫にあたる。夫人の吉備内親王は、天武天皇皇子の草壁皇子と姉妹である。彼は左大臣正二位の729（天平元）年2月、藤原氏の陰謀により妃の吉備内親王、四人の皇子と自頸した。1989年デパート建設の事前調査で発見した多量の木簡に「長屋皇宮」などとあって、長屋王邸跡と判明した。奈良国立文化財研究所1995『平城京左京三条二坊・二条二坊発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第54冊。

（15） 奈良国立文化財研究所1975『平城宮発掘調査報告第Ⅵ　左京一条三方の調査』奈良国立文化財研究所学報第23冊。

（16） 奈良国立文化財研究所1986『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第44冊。

（17） 金子裕之1988「長屋王は左道を学んだか」『歴史読本』1988年12月臨時増刊号、140－147。同1997『平城京の精神生活』角川選書282、p. 176。

（18） 奈良市1986『特別史跡平城京左京三条二坊宮跡庭園復原整備報告書』14－16。

（19） これを流水溝としたのは本中真氏である。牛川喜幸氏は流れの重要性普遍性を説き、本中真氏は、曲水を遣り水型と流杯型に分け、流杯型から遣り水型に変遷するとする。本中真1994『日本古代の庭園と景観』吉川弘文館。その様相はかなり複雑である。

（20） 奈良国立文化財研究所「東院庭園地区およびその隣接地の調査」『奈良国立文化財研究所年報1998－Ⅲ』16－36、特にp. 32の図35参照。

（21） 帝室博物館1941『正倉院御物図録』13、第48図に、やはり宝物の「蓮池」とともに仏前供養具とする説明がある。「蓮池」は第46、47図に説明があり、径が33.4～33センチメートル、高さ30センチメートル。朴の材を刳り抜き不正形の池形を作り周に堤塘をめぐらし、池中洲浜形を刻出してそこより五茎の蓮を生ぜしめたもの。蓮華は金銅で作り、蓮花、蓮荅、巻葉、荷葉を漆銀箔で作る。池塘には起伏する七個の岩石を刻し銀色に塗り、池中には緑青を彩し処々に白砂を散し貝殻を敷置、という。大仏開眼供養会の供養具であろう。文学作品と違って、池の形態を視覚的に表現する。

（22） 秋山光和1982「唐代敦煌壁画にあらわれた山水表現」『中国石窟　敦煌莫高窟』第5巻、p. 199。

（23） 奈良国立文化財研究所1985『平城宮発掘調査報告ⅩⅡ』奈良国立文化財研究所学報第42冊、p. 68。

（24） 粟田真人を執節使とする第7次遣唐使（701任命、702年出発、704年帰国）は、669（天智8）年の第6次遣唐使から30年余を経る。逆に、多治比県守等の第8次遣唐使は716（霊亀2）年の任命で、出発が717年、帰国が718年と長屋王邸の曲水よりも年代が降る。第7次遣唐使は、663（天智2）年の白村江における唐・新羅連合軍と日本・百済連合軍との戦争によって中絶した日唐間の文化交流を本格的に再開した点で重要である。庭園型式の変化も、第7次遣唐使がもたらせた成果の一端であった可能性がある。

（25） 奈良国立文化財研究所1995『平城京左京三条二坊・二条二坊発掘調査報告』奈良国立文化財研

究所学報第54冊

(26) 浅川滋男1996「板に描かれた楼閣山水図」『古都発掘』岩波新書468、189－192。ただしここでは滝から落ちる水と、障壁を隔てて楼閣の傍らの中嶋がある園池との関わりが明確ではない。嶋のある園池は欠損部にある画面左側に続くようであり、滝水が逆時計廻りに流れて暗渠などの施設で壁下を通り、嶋に注ぐのであろう。

(27) 奈良国立文化財研究所1995『平城京左京三条二坊・二条二坊発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第54冊、408－454。

(28) いわゆる「国家珍宝帳」である。『大日本古文書』巻4－121～175。

(29) 現存する屏風の実際については、正倉院事務所編『正倉院宝物』毎日新聞社、第1巻 北倉1、第2巻 北倉2に写真図版があり、第5、7、8の各巻に屏風絵の一部を収載する。
「献物帳」と正倉院宝物の山水画については、松下隆章氏の総括的な考察がある。松下隆章1968「献物帳畫屏風について」正倉院事務所編『正倉院の絵画』日本経済新聞社、141－148。
また、中国の山水画に関する論考は、米沢嘉圃1962『中国絵画史研究　山水画論』平凡社。鈴木敬1981『中国絵画史』吉川弘文館。秋山光和1982「唐代敦煌壁画にあらわれた山水表現」『中国石窟　敦煌莫高窟』第5巻、190－204などがある。

(30) 引用は、小島憲之校注1964『懐風藻　文華秀麗集　本朝文粋』日本古典文学大系69、岩波書店。

(31) 高山暹治1987「神仙思想と古代都市」『奈良県観光新聞』369号。

(32) 上田正昭「古代信仰と道教」『道教と古代の天皇制』徳間書店。

(33) 末永雅雄1980「吉野と宮滝遺跡」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書』第40冊、末永雅雄・前園実知雄1986『増補宮滝の遺跡』木耳社、他。

(34) 千田稔1987「都城選地の景観を視る」『日本の古代9 都城の生態』中央公論社、115－146、119－121。

(35) 水野正好1998「湧水とまつりと遊び」『復元バンザイ城之越遺跡』伊賀上野市、11－14。
時代と地域が異なるが、中国河南省濮陽西水坡遺跡で検出した新石器時代（B.C約3500）の45号墓には玉石で象った蒼龍と白虎がある。馮時1990「中国河南省濮陽西水坡45号墓的天文学研究」『文物』1990－3、50－60。
また、龍が宮殿の東池に現れる記事は『三国史記』新羅本紀第二などにみる。

(36) 武帝の船に鷁（青鷺）を飾っていれば、この船遊びは皇帝の遊びであり、平安前期の『源氏物語』などにみえる龍頭鷁（青鷺）首の船遊びに連なるという。大形徹「龍と鳥の船をめぐって」〈東アジア地中海世界における文化圏の形成過程〉1996年7月20日研究会報告。
龍頭と鷁首は中国では別の船の舳先に付けたが、日本では一隻の船の前後を飾ることになった。太田静六1987「龍頭鷁首舟」『寝殿造りの研究』吉川弘文館、860－866。

(37) 大韓民国文化財管理局、西谷正他訳1993『雁鴨池発掘調査報告書』学生社。同書の「Ⅱ 歴史的背景」は雁鴨池の名は来歴不詳とする。

(38) 平城宮東院庭園はこの池を模倣としたとする説がある。本中真1992「平城宮東院庭園に見る意匠・工法の系譜について」『庭園雑誌』55巻4号、109－114。奈良国立文化財研究所1998『東院庭園』（展示パンフ）は、この見方をうけつぐ。
7世紀後半代の新羅との交流は毎年のように訪れる新羅使節と遣新羅使の往来が史料にみえるので、可能性は否定できない。しかし、先に述べたように、雁鴨池は深い上に朝鮮半島特有の石積みの切り立った岸辺を形成し、岸の北半部は曲率が多い入り江を形成するものの南半部は直線的である。これに対して、
① 平城宮東院庭園は両岸とも出入りが大きい上に池底が浅く、敷きつめる玉石は径が小さい。
② 雁鴨池では導水路に流盃渠あるいは観賞用小池にあたる石槽二基と石組み遺構一基があり、その先に広大な園池がある。東院庭園の流盃渠は雁鴨池と逆に排水溝の位置にある上に、成立時期も8世紀後半に降る。また池自体の規模も異なる。さらに、雁鴨池は地形的に南が高く、水は北に流れるが東院はこれと逆で青龍の流れである。飛鳥の地形は南が高く北が低い。これらは雁

鴨池と飛鳥地域の園池との類似性を示す証左である。東院庭園と雁鴨池の関係は一部であろう。

(39) 三浦國雄氏は武王35（634）年春の方丈仙山記事と、二条大路木簡「楼閣山水図」をもって、道教の流伝とする。車柱環著、三浦國雄・野崎充彦訳1990『朝鮮の道教』三浦國雄「訳者あとがき」p.394，401－402。

(40) 田中俊明・東潮1988『韓国の古代遺跡　百済・伽耶篇』中央公論社、p.165。および東潮氏の示教による。

(41) 建康と名を変える以前の建業には南苑があり、『文選』と双璧を成す『玉台新詠』巻六には、何思澄「南苑逢美人」がある。内田泉之助注釈1974・75『玉台新詠』上下、明治書院。これについては多田伊織氏の教示を得た。

(42) 森蘊1962『寝殿系庭園の立地的考察』奈良国立文化財研究所

(43) 牛川喜幸1996『池泉の庭　日本の庭園2』講談社

(44) ちなみに、奈良国立文化財研究所1998『発掘庭園資料』が収載する発掘庭園では、滝や滝石組を構成要素にもつ例は29箇所。うち最も遡るのは大覚寺大沢池の9世紀代で、平安京跡における発掘庭園の多くは12世紀に降る。そして各地の庭園はさらに降った室町時代以降である。

(45) 大覚寺1994『史跡大覚寺御所跡発掘調査報告－大沢池北岸域復原整備事業に伴う調査』

(46) 本中真「第Ⅴ章考察　1遺構変遷」『同書』120－122。

(47) 本中真「第Ⅲ章遺跡　2遺構」『同書』p.32）と記述が矛盾するかのようである。本中氏の教示では（1998年11月17日）、SD43の初期から名古曽滝があったか否か不詳で、9世紀以降のある段階に据えた可能性もあるという。

(48) 周維権1990『中国古典園林史』中国清華大学出版社、101－105。
張家驥編著1997『中国園林芸術大辞典』山西出版社、141－142。

(49) 河原武敏1992「宋代の艮岳に関する二三の考察」『日本造園学会関東支部大会研究・報告発表要旨』第10号、35－36等。

(50) ここには36洞天がある。道教信仰では十大洞天・三十六小洞天・七十二福地のランクがあり、名山勝地の奥深くにある神仙の住む別天地の意味でもある。三浦国雄「洞天福地小論」『中国人のトポス』平凡社、1988、71－112。
『真誥』については「六朝道教の研究」研究班による訳注稿が、京都大学人文科学研究所『東方学報』第68冊、1996年以降刊行中である。

(51) 中野美代子1994「園林を作る視線」『月刊しにか』5巻2号、8－14。

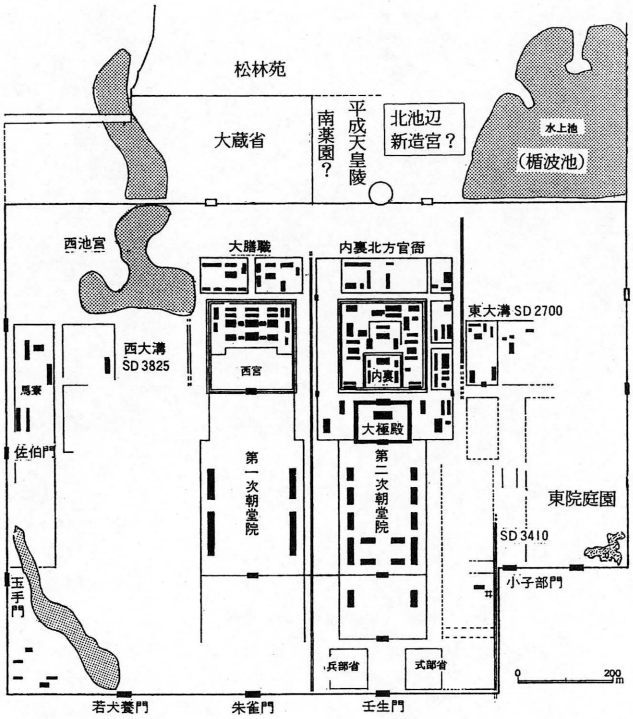
(52) 『源氏物語』胡蝶、龍頭鷁首の船遊び場面で詠まれた和歌には、
亀の上の山もたずねじ船のうちに老いせぬ名おばここに残さむ
とある。「亀の上の山」は亀（鼇）の上にのる蓬萊山のこと。
佐藤亮一校注1979『日本古典集成 源氏物語四』胡蝶、新潮社、32－33。
京都天竜寺の池庭では、曹源池のほぼ中央西岸に滝組があり、背後には亀山がある。この名は天竜寺が鎌倉時代の亀山殿の跡地に営んだことによるが（森蘊『寝殿系庭園の立地的考察』p.39)、右と無関係ではないように思う。

(53) 森蘊『寝殿系庭園の立地的考察』55－56。『発掘庭園資料』88－91。

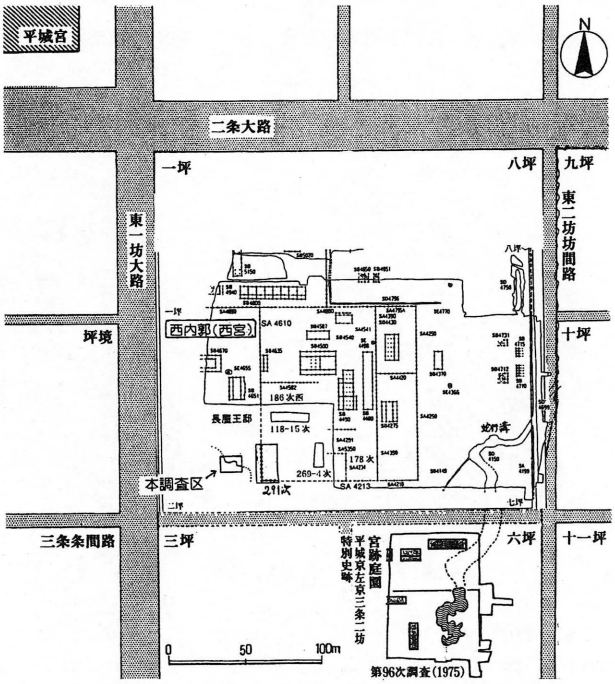
(54) 杉山信三1969「法金剛院調査概要」『京都府埋蔵文化財発掘調査概報1969』、家崎孝治1986「法金剛院境内遺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和61年度』などがある。

(55) 河原武敏1994「海を渡った園林」『月刊しにか』5巻2号、22－28、特にp.24。

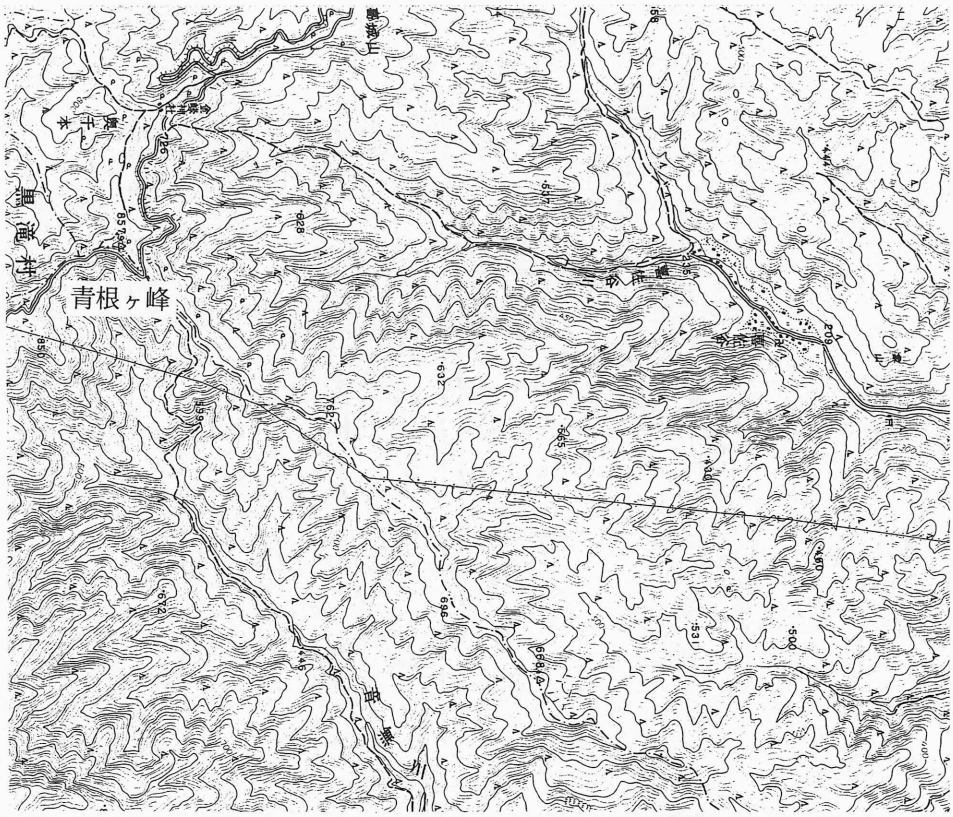
補注　1999年の調査では、東院庭園の西で石敷きの曲水渠を検出した。確認部分は約24メートル。平らな石を敷きつめた渠幅は1.1メートルから1.5メートル。玉石敷きの小池があり、雁鴨池の導水路の構造と基本的に共通する。8世紀前半であり、この時期の東院庭園と飛鳥期園池の構造が関連する可能性がある。本文の一部や註（38）など改める必要があるが、校正中のことであり改訂は控えた。2000年9月24日記



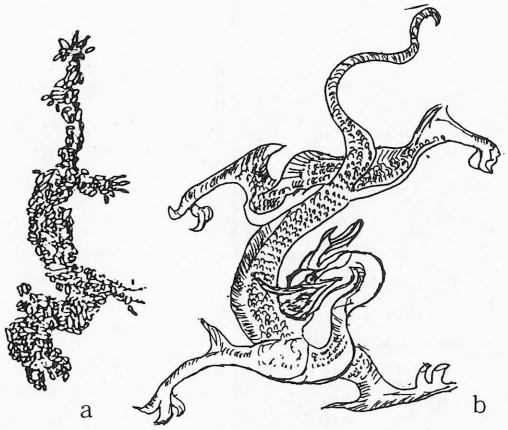
第１図　平城宮内の庭園



第２図　長屋王邸の曲水跡と左京三条二坊宮跡庭園（奈良国立文化財研究所原図。一部改変）



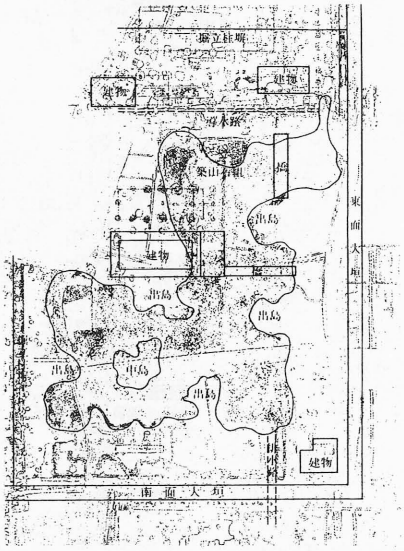
第3図　特別史跡左京三条二坊宮跡庭園と宮滝遺跡付近の地形図（高山運治）



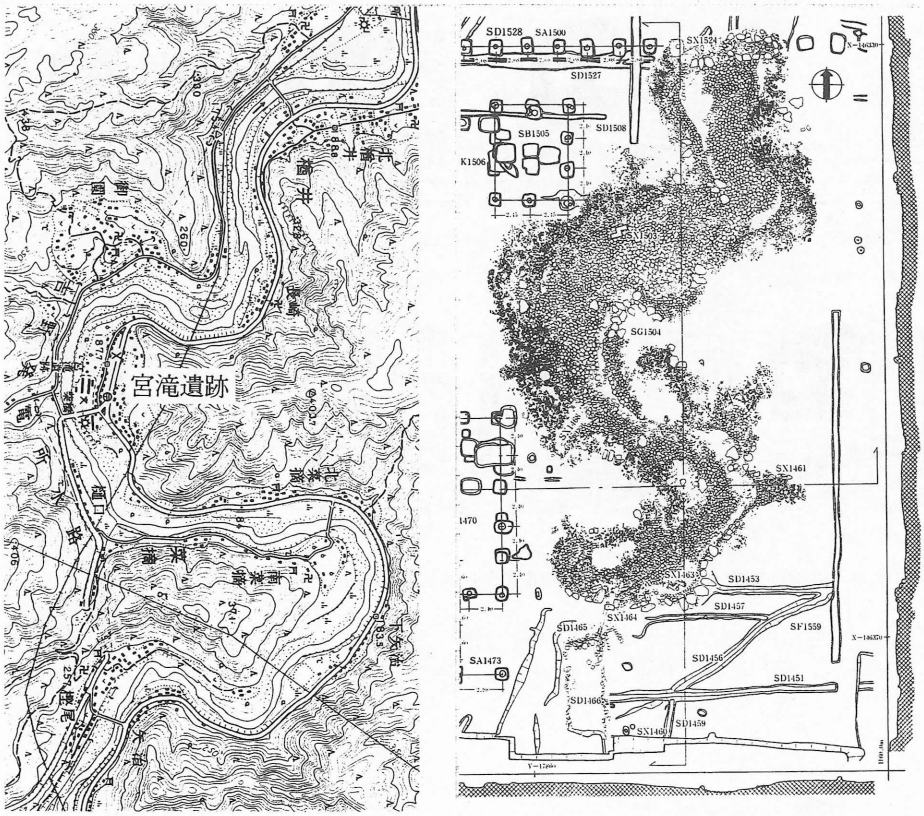
第4図　龍の造形

a　中国阿南省西水坡置跡宝石「蒼龍」文物 1990－3 による。図は裏返し

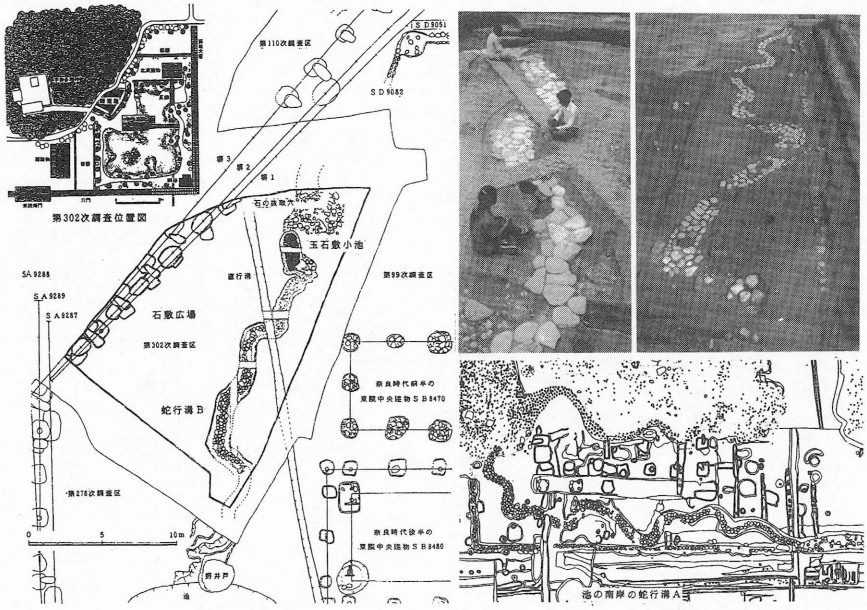
b　正倉院金銀山水八卦背八角鏡より描き起こす



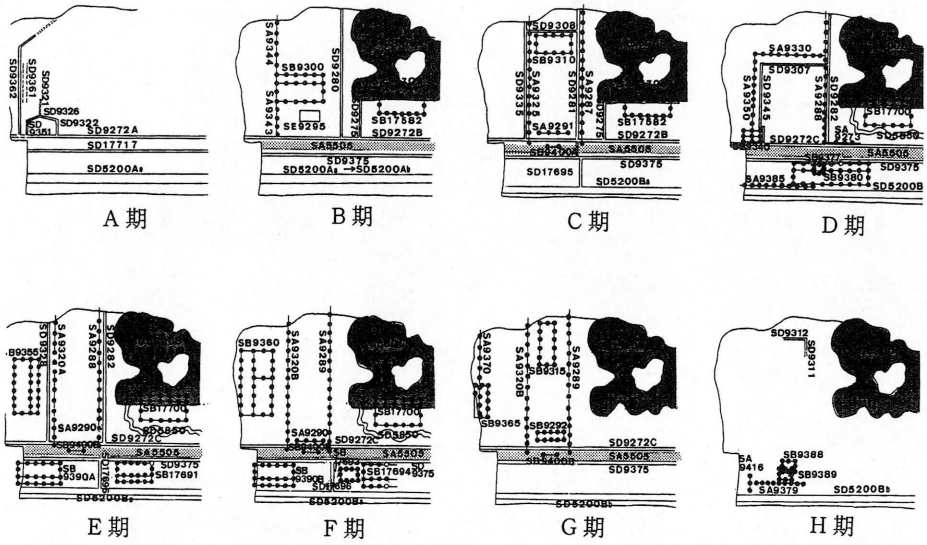
第5図　東院庭園全体図（奈良国立文化財研究所「東院庭園」による）



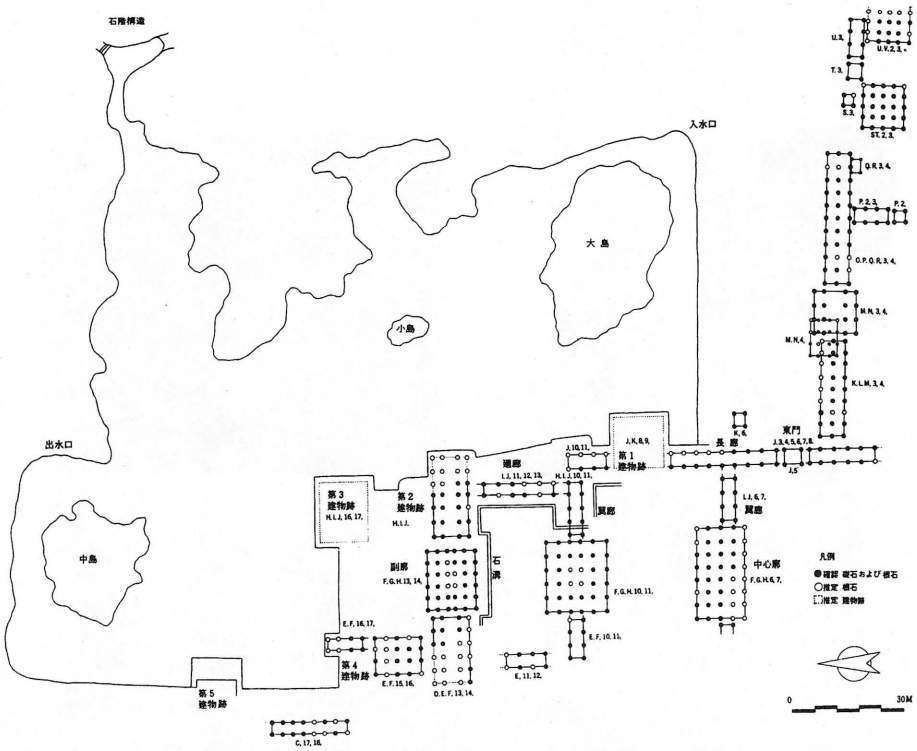
1974 および『平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告』PLAN. 6 による）



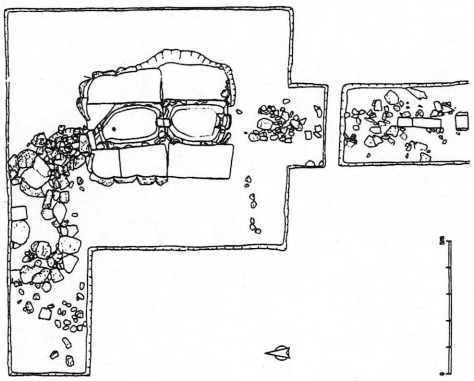
第 6 図　東院庭園の西側および南側の曲水渠　岩永省三「平城宮の苑池東院庭園」『シンポジューム　いま探る古代の庭園』2000 pp. 42－43 による（奈良国立文化財研究所許可済）



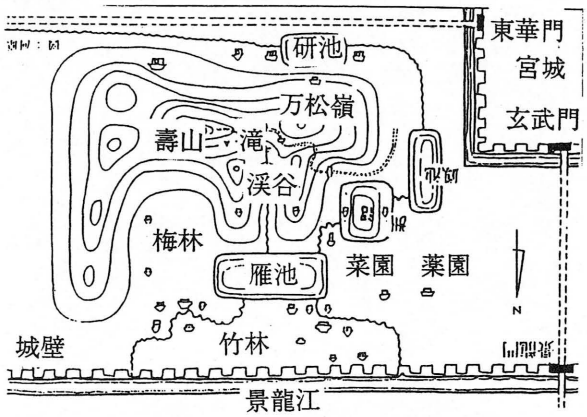
第 7 図　東院庭園南西部の変遷（『奈良国立文化財研究所年報 1998－Ⅲ』図 35 による）



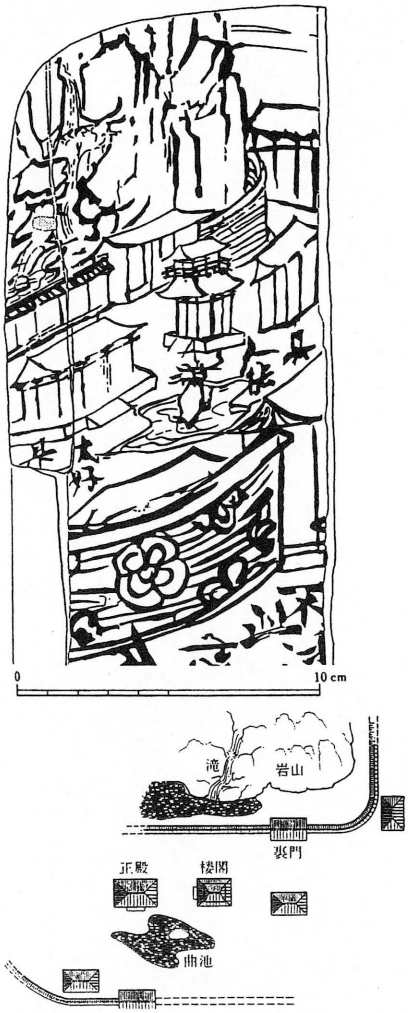
第 8 図　雁鴨池と周辺建物配置図（『雁鴨池発掘調査報告書』p. 73 による）



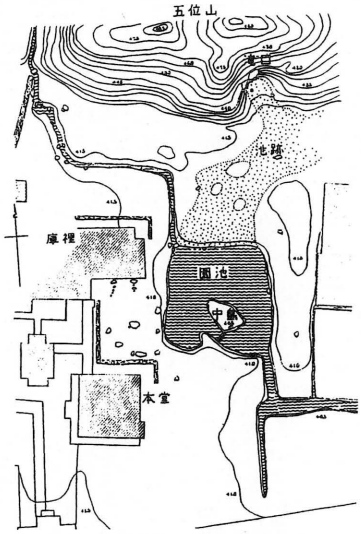
第9図　雁鴨池入水工口の石水槽（『雁鴨池発掘調査報告書』図面5による）



第11図　宋代の艮岳復元図（河原武敏1992による。南北を原著と逆に図示）



第10図　二条大路楼閣山水図と図解（図解は浅川滋男1996による）



第12図　法金剛院庭園実測図（森蘊『寝殿系庭園の立地的考察』p. 56による）